鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第30号，31－41　2000

養護実習生のストレスに関する研究（　）

―実習ストレッサーの分析―

有　村　信　子

On the Stress in the Practice for the College Students of School Nurse-Teacher Course (　)

Nobuko Arimura

児童生徒の健康問題は，心の健康や喫煙，薬物乱用などますます深刻化し，養護教諭への期待が大きく膨らみつつある．養護教諭養成課程の学生はそのような問題を抱える学校教育現場で養護実習を体験する．そこで，養護実習において学生が受けるストレスの構造を明らかにし，どのような要因によってストレスが左右されるかを分析した．その結果，養護実習生における実習ストレッサーは，養護技術的なものに起因したものでなく，周囲の期待や教師との関係など心理的な，特に人間関係的要素を含んだものが中心であることが明らかになった．さらに，主体的に実践する保健指導を行った実習生が，しなかった実習生より保健指導に対する自信のなさを大きく感じ，また，補助的関与が強い保健行事を経験しなかった実習生は，経験した実習生に比べ未熟な養護技術に対する不安を強く感じているように，保健指導の経験や保健行事の有無がストレスを左右する要因となっている．今後は，これらのストレスの実態がどう解決されるかについての検討が必要になる．

Key words:［実習ストレッサー］［養護実習］［期待負担因子］［否定感情因子］

(Received November 4, 1999)

目　的

近年，児童生徒の健康問題は，不登校やいじめをはじめとする心の健康や喫煙，薬物乱用などますます深刻化している．このような健康問題を抱えた学校教育現場において，養護教諭は平成７年４月から保健主事への途が開かれるとともに，平成10年７月から保健の授業を担当することができるようになった．これらの改正は養護教諭がもっている知識や技能を生かして学校保健の中心となり，児童生徒の健やかな心身の発達を援助するため活動することを期待していることを意味し，養護教諭の役割はますます拡大されているといえよう．

養護教諭を目指して入学してきた養護教諭養成課程の学生は，教育界でこのように養護教諭への期待が膨らむなか，養護教諭免許状を取得するため養護実習を体験することとなる．養護

鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻養護コース（〒890-8525鹿児島市唐湊４丁目22番１号）

実習はこれまで学習して得られた知識や技術を基礎とし，学校現場での実践活動を通して学校保健活動および養護教諭の果たすべき役割を理解していくことである．一方，養護実習は学生がこれまで児童生徒として学ぶ側から教える側に大きく転換する体験であり，学校では当然，全教職員や児童生徒と何らかの形で接するなど実習期間中の負担感もしばしば報告されてきた．

筆者は前回の研究（有村，1998）で，学生が養護実習中に感じるポジティブな面，例えば，教職員からの励ましや応援，児童生徒からの声掛けなど温かい関わりによって勇気づけられたことなどを取り上げ，養護実習の前後における教職志望度および教職適性感の変化がどのようなことによってもたらされるかを検討した．その結果，養護実習中の様々な体験の中で，学生の養護教諭への志望度に大きな影響を与えるものは，児童生徒との人間関係であることが明らかになった．一方，養護実習は学生たちにとって当然，ネガティブな面も含む経験と考えられ，各種ストレッサーとの出会いやストレスの蓄積が，これら教職への志望度，適性感等に非常に大きな影響を及ぼすことが懸念される．しかし，これまで養護実習中のストレスに関する研究は，その構造を必ずしも明らかにしているとはいえない．

これまでの養護実習に関する研究では，養護実習事前・事後指導の内容，養護実習の内容および評価に関するものがほとんどである．例えば，竹田由美子ら（1998）は養護実習の内容改善のため学生が実施したたばこの保健指導案を検討した結果，指導の展開内容がたばこの害を中心としたものが多く，喫煙を防止するための行動目標の展開方法を開発する必要性を指摘している．

そこで，本研究では，養護実習のストレスの構造を明らかにし，どのような要因によってストレスが大きく左右されるかを検討した．

方　法

1　調査対象

鹿児島純心女子短期大学学生（生活学科養護コース）２年　66名

2　調査期日

この調査は，養護実習終了後，最初の養護実習の講義（実習終了後４日以内）である1999年６月24日，７月１日の２回に分けて，調査用紙を配布し，無記名・自己記入式で実施した．なお，今年度の養護実習（３週間）は，実習校の都合により実習開始が５月31日と６月７日に分かれて行った．

3　調査項目

調査項目については，有村（1998）が実施した養護実習中に体験したことに関する予備調査で得られた結果を参考に，学生たちの日誌や救急処置および保健指導の実施調査（実施の有無，準備・実施内容，児童生徒の反応，指導者の助言等）および自己評価の中から選択したものを追加した．さらに，大野木裕明ら（1996）が作成した教育実習不安の調査項目から６項目をリストアップして参考にした．

これらを基に作成した40項目について，負担に感じたり，そう思ったりしたことについて，

「そう思う」,「ややそう思う」,「ややそう思わない」,「そう思わない」の４段階で自己評定させた.

結果および考察

１　フェイス項目の分析

実習校の学校種

66名の学生が実習に行った学校種は，小学校28名（42.4%），中学校38名（57.6%）であった．それぞれの実習校における養護教諭の配置状況は，１人配置63名（95.5%），２人配置３ 名（4.5%）であった.

実習校の児童生徒数

実習校の児童生徒数は19名から最高1,150名と幅があり，その結果はFig.１に示したとおりである．この後の分析のために児童生徒のメジアンである450人を境に，450人超の児童生徒数H群と450人以下の児童生徒数L群に折半した.

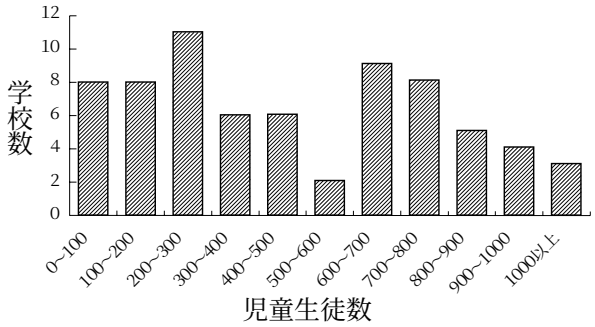

Fig.１　実習校の児童生徒数

養護教諭の指導経験

66名の学生が指導を受けた養護教諭の実習指導経験は,「今回初めて」が16名（24.2%）,「２回目以上」が49名（74.2%），また無回答が１名（1.5%）であった.

養護教諭の年齢

養護実習の指導を行った養護教諭の年齢については，Fig.２に示したような結果が得られた．すなわち，30歳代，40歳代が多く，次いで20歳代となっている.

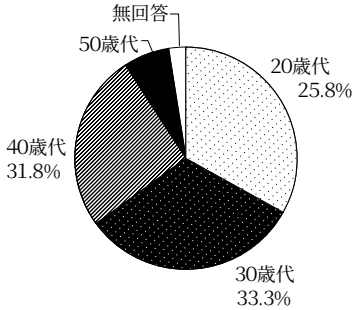

Fig.２　実習指導の養護教諭の年齢

学級配属の有無

実習校の児童生徒との多面的で，かつ積極的な関わりが期待できる学級配属について，配属の「あった」者56名（84.8%），「なかった」者10名（15.2%）であった．

保健指導の経験

本学では，養護実習において学校教育現場で要求されている養護教諭の保健指導に鑑み，従来から実習校に対して，保健指導の場をできるだけ設定していただくよう要望してきたところである．そうした保健指導について，保健指導を「経験した」者59名（89.4%），「経験しなかった」者７名（10.6%）であった．

保健行事の経験

実習期間中に内科検診や日本脳炎予防接種など何らかの保健行事を「経験した」者が63名（95.5%），「経験しなかった」者が３名（4.5%）であった．

保健室登校の児童生徒の有無

何らかの状況で教室に入れない児童生徒，いわゆる保健室登校の児童生徒が「いた学校」で実習した者21名（31.8%），「いなかった学校」で実習した者45名（68.2%）であった．

不登校気味の児童生徒に関わった経験

上記の保健室登校の児童生徒を含め，ちょっとしたきっかけで不登校になりそうな児童生徒に実習中に関わる経験が「あった」者34名（51.5%），「なかった」者32名（48.5%）であった．

２　実習中の「ストレス」の構造

実習中の「ストレス」に対する因子分析

実習中に体験した「ストレス」に関する40項目（これらはすべて養護実習ストレッサー項目である）に対して，「そう思う」から「そう思わない」と回答した順に４，３，２，１点と得点化した．因子分析（Varimax 回転を含む）を行った結果，６因子を抽出した．なお，第６因子までの累積寄与率は52.3%であった．因子負荷量が0.5以上の養護実習ストレッサー尺度項目（29項目）および因子負荷量を Table １に示した．第１因子は「32. 子供から養護教諭になってほしいと言われ負担に感じた」「28. 養護教諭から養護教諭に育ってほしいと言われ負担に感じた」「27. 子供から頼りにされ負担に感じた」などの項目に高い負荷量をもつことから「養護教諭になることへの期待に対する負担」因子と命名した．第２因子は「22. 先生たちの子供に対する態度を見て抵抗を感じた」「12. 養護教諭の子供に対する態度を見て抵抗を感じた」「29. 先生たちの保健行事等への協力が少なく不満に感じた」などの項目に負荷量が高いことから「教師たちの態度に対する否定感情」因子と命名した．第３因子は「15. 救急処置で問診や視診，触診などが未熟だと思った」「36. 救急処置の処置技術が未熟だと思った」「５. 健康観察の技術が未熟だと感じた」などの項目に負荷量が高いことから「未熟な養護技術に対する不安」因子と命名した．第４因子は「16. 保健指導案の作成や教材準備に負担を感じた」「25. 保健指導がスムーズに行えるか心配に思った」などの項目に負荷量が高いことから「保健指導に対する自信のなさ」因子と命名した．第５因子は「31. 学校環境衛生の検査技術が未熟だと思った」「21. 養護教諭の自分への評価が気になった」などの項目に負荷量が高いことから「評価されることへの負担」因子と命名した．第６因子は「18. 実習期間中，体力が持つか不安に感じた」「６.

Table 1　実習中の「ストレス」に関する項目の因子分析結果（29項目・6因子）

項　　目	因子負荷量（括弧内は寄与率）					
	(15.8)	(10.6)	(7.5)	(7.0)	(6.0)	(5.6)
「養護教諭になることへの期待に対する負担」因子						
32. 子供から養護教諭になってほしいと言われ負担に感じた	.78625					
28. 養護教諭から養護教諭に育ってほしいと言われ負担に感じた	.78041					
27. 子供から頼りにされ負担に感じた	.73685					
14. 健康診断の検査や測定そのものに負担を感じた	.69097					
7．実習生としての態度を一日中とり続けるのに疲れを感じた	.62951					
38. 校外でも実習生として見られるのに負担を感じた	.52572					
「教師たちの態度に対する否定感情」因子						
22. 先生たちの子供に対する態度を見て抵抗を感じた		.73701				
12. 養護教諭の子供に対する態度を見て抵抗を感じた		.67816				
23. 健康観察について保健委員への指導を負担に感じた		.64915				
29. 先生たちの保健行事等への協力が少なく不満に感じた		.58237				
35. 健康観察の統計や分析に負担を感じた		.56595				
33. 養護教諭の実習生受け入れ態度に不満を感じた		.54497				
「未熟な養護技術に対する不安」因子						
15. 救急処置で問診や視診，触診などが未熟だと思った			.75766			
36. 救急処置の処置技術が未熟だと思った			.73917			
13. 先生たちと人間関係を作るのに疲れを感じた			.60451			
5．健康観察の技術が未熟だと感じた			.57834			
24. 救急処置の養護診断に迷って困った			.53904			
17. 子供の相談にのれずカウンセリングの未熟さを感じた			.52507			
「保健指導に対する自信のなさ」因子						
9．実習日誌を書くのが負担に思った				.72029		
16. 保健指導案の作成や教材準備に負担を感じた				.63537		
25. 保健指導がスムーズに行えるか心配に思った				.59455		
2．養護教諭と人間関係を作るのに疲れを感じた				.51504		
「評価されることへの負担」因子						
20. 子供の気持ちを理解するのは難しいと思った					.73604	
31. 学校環境衛生の検査技術が未熟だと思った					.66938	
21. 養護教諭の自分への評価が気になった					.66773	
37. 保健指導中，子供の質問に答えられるか心配だった					.58790	
「養護実習への適応の不安」因子						
11. 子供に指示を守らせるのは難しいと思った						.72608
18. 実習期間中，体力が持つか不安に感じた						.64596
6．学校給食を全部食べられるか不安に感じた						.57731

学校給食を全部食べられるか不安に感じた」などの項目に負荷量が高いことから「養護実習への適応の不安」因子と命名した.

この結果から養護実習生における実習ストレッサーは，第１因子や第２因子に見られるような非常に心理的なものに起因するものが強く，第３因子や第４因子のような技術的な内容に起因する実習ストレッサーより因子構造上，上位にきていることが注目される.

フェイス項目と各因子得点との関係

第１因子から第６因子までの各得点，すなわち，実習ストレッサー尺度の各因子が各フェイス項目とどのように関係するか検討を行った.

実習校の学校種と実習ストレッサーとの関係

実習校が小学校であるか中学校であるかは，第６因子のみ有意差があり（$t=2.890, df=64, p<.01$），小学校よりも中学校での実習の方が「養護実習への適応の不安」を強く感じていることが明らかになった（Fig. 3 参照).

実習では，因子分析で明らかなように種々のストレッサーとの遭遇が予想される．従って，児童生徒への各種養護技術および指導等各人が自分の能力に対する自信のなさによって引き起こされるものもある．一方では，自分を児童生徒や教師がどう受け入れてくれるかという不安「第１因子」,「第２因子」,「第５因子」も存在すると考えられる．この中で小学生と中学生の違いは，第６因子「養護実習への適応の不安」のストレッサーでのみ見い出された．そのことは，小学生と中学生の違いが，具体的に指導技術や指導内容で大きく異なっているのではなく，中学校というものに対する漠然とした不安感が背後にあると感じられる．学生たちは，小学生に比べて中学生の思春期特有の行動や中学生が引き起こす事件等を目にしたり，マスコミをはじめ様々なメディアから情報を得る中で，漠然とした不安感を生じさせているのではなかろうか.

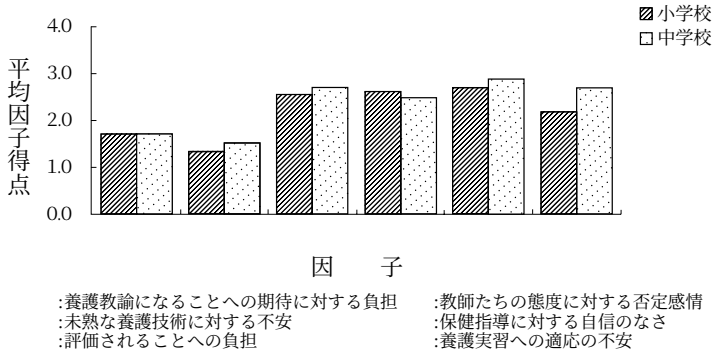

Fig. 3　実習校の学校種と実習ストレッサーとの関係

実習校の児童生徒数と実習ストレッサーとの関係

児童生徒数H群（450人超）と児童生徒数L群（450人以下）との各因子得点を比較したところ，すべての因子において学校規模による差はなかった.

養護教諭の指導経験と実習ストレッサーとの関係

実習指導にあたった養護教諭の実習指導経験が「今回初めて」と「２回目以上」とでは，第５因子の「評価されることへの負担」のみ有意差があり（t＝2.114,df＝63,p＜.05），「今回初めて」より「２回目以上」の方が養護教諭から評価されることへの負担感が強い（Fig.４参照）．

このことは，指導初回と複数経験の指導者では，明らかに評価者としての目がそこに実在していることを実習生に意識させたという点で違いがあったことを意味し，端的には，複数経験の指導者の「評価的な目」の厳しさを実習生が感じたことになる．しかし，実習指導者側からこのことを考えてみると，指導初回の養護教諭が，その経験のなさから評価的な立場のかかわりを示し得ることができなかったともいえよう．事実，有村（1998）は，養護教諭の執務上の悩みに関する調査を行ったところ，悩みの上位は「養護実習の指導に関する資料が少ない」「実習計画を立てるのが大変である」「毎日の実習日誌へのコメントが大変である」であり，養護実習生がやってくるまでの間に悩み，疲れている実情が浮き彫りにされた．このような状況から養護実習の指導に初めてあたる養護教諭にとって，養護実習は試行錯誤の連続とも考えられ，実習生への評価までは余裕がない状況も予想されるのである．

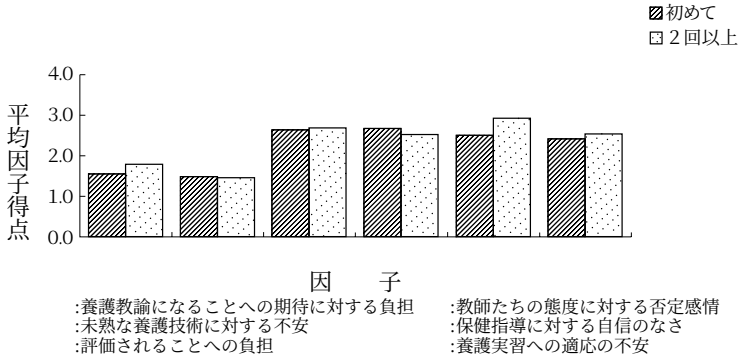

Fig.４　養護教諭の実習指導経験と実習ストレッサーとの関係

養護教諭の年齢と実習ストレッサーとの関係

実習指導にあたった養護教諭の年齢と各因子得点の関係をすべての養護実習ストレッサー因子について，いっさいかかわらないことが明らかになった．すなわち，養護教諭の年齢は，実習生のストレスに直接影響を与えていないことがわかる．

学級配属と実習ストレッサーとの関係

学級配属の有無では，第４因子のみ差が有意の傾向にあり（t＝1.760,df＝64,p＜.10），学級配属がなかった者より学級配属された者が「保健指導に対する自信のなさ」（第４因子）によるストレス感の傾向が大きい．

保健指導は，学級配属された学級においてほとんど実施している関係上，学級配属なし群では，保健指導そのものに対する実際上の場面の少なさが影響しているとも考えられる．

保健指導の経験と実習ストレッサーとの関係

上述の学級配属との関係から当然予想されることでもあるが，保健指導の経験の有無では，第４因子のみ有意差が見られた（t＝3.280,df＝64,p＜.01）．従って，保健指導をしないより実践した方が保健指導に対する自信のなさは大きくなってしまうことが予想される．このことは，

保健指導を実際にやってみて，指導の難しさの実感（児童生徒の反応，指導者の助言，自己評価等）が現れているともいえる．

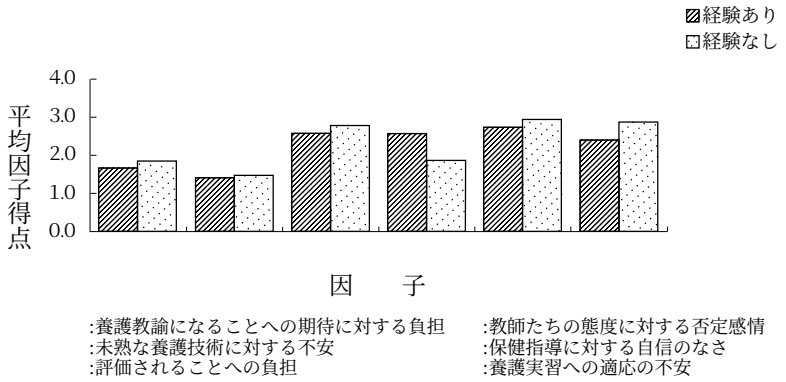

Fig.5 保健指導の経験と実習ストレッサーとの関係

保健行事の有無と実習ストレッサーとの関係

保健行事の有無においては，第３因子に有意な差がある傾向にあり（$t=1.676, df=64, p<.10$），保健行事があった方よりもなかった方が未熟な養護技術に対する不安を感じている．また，第５因子で有意差があり（$t=2.863, df=3.913, p<.05$），同じく保健行事があった方よりもなかった方が養護教諭から評価される負担を感じている（Fig. 6 参照）．

これらのことは，一見　や　の結果と逆であり，矛盾しているようにも感じられる．しかし，保健指導と異なり，保健行事は実習生の主体的関与感は必ずしも高くなく，むしろそうした行事に遭遇しなかったことが，自分の未熟な技術に対する不安を高め，評価懸念を増大させたと考えられよう．

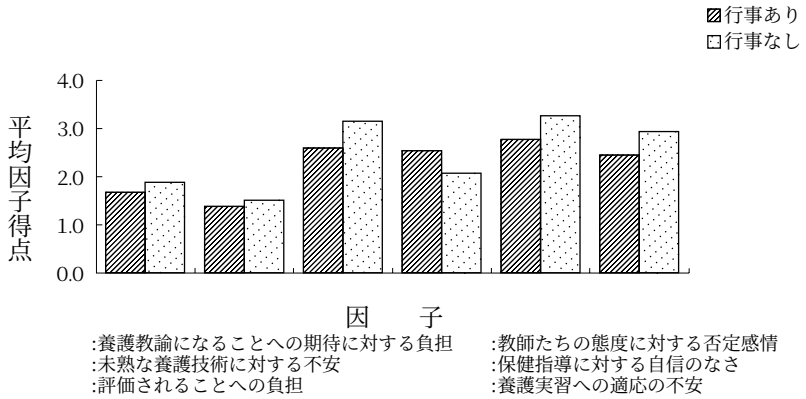

Fig. 6　保健行事の有無と実習ストレッサーとの関係

保健室登校の児童生徒の有無と実習ストレッサーとの関係

保健室登校の児童生徒の有無においては，第３因子に有意差があり（$t=3.437, df=64, p<.01$），保健室登校の児童生徒がいない方よりもいた方が自分の未熟な養護技術に対する不安を多く感

じている（Fig. 7 参照）．また，第５因子に有意差があり（t＝2.440,df＝64,p＜.05），保健室登校の児童生徒がいない方よりもいた方が評価されることへの負担を感じている．さらに，第６因子に有意な差がある傾向にあり（t＝1.918,df＝64,p＜.10），保健室登校の児童生徒がいない方よりもいた方が「養護実習への適応の不安」を感じている．

保健室登校の児童生徒を眼の前にして簡単な会話から始まった関係が，それ以上に進展せず，どう対応してよいのか困っている実習生の姿が浮かんでくる．おまけに，保健室という限られた空間の中で指導する養護教諭がすぐそばにいるわけである．このことは，実習生自身の養護技術の未熟さをいやがおうにも知らされることにもなり得るように，指導者である養護教諭の評価の目を意識することにもつながると考えられる．

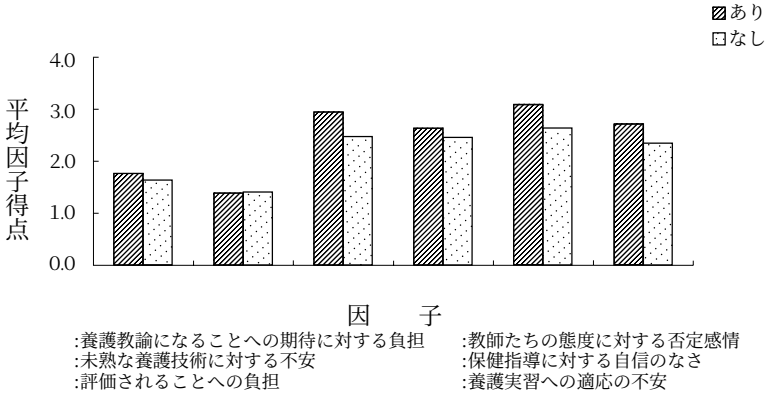

Fig. 7　保健室登校の児童生徒の有無と実習ストレッサーとの関係

不登校気味の児童生徒に関わった経験と実習ストレッサーとの関係

不登校気味の児童生徒との関わり経験の有無については，すべての実習ストレッサー因子得点において，差は生じなかった．

ま　と　め

本研究で得られた結果を要約すると，以下のようになる．

1）養護実習生における実習ストレッサーは，「未熟な養護技術に対する不安」因子や「保健指導に対する自信のなさ」因子など技術的なものに起因するものより「養護教諭になることへの期待に対する負担」因子や「教師たちの態度に対する否定感情」因子など心理的なものに起因するものが強い．

2）実習校の学校種では，小学校に比べて中学校へ実習に行った学生は，中学校への漠然とした不安感を感じている．

3）実習校の養護教諭の実習指導経験では，実習生が経験２回目以上の養護教諭の「評価的な目」をより感じている．

4）実習生が主体的に実践する保健指導の経験では，保健指導を行った実習生が経験しなかった実習生に比べ指導に対する自信のなさを大きく感じている．

５）補助的関与が強い保健行事の経験では，保健行事を経験しなかった実習生が経験した実習生に比べ未熟な養護技術に対する不安を強く感じている．

６）保健室登校の児童生徒がいた実習生の方が，自分の未熟な養護技術に対する不安を多く感じている．

本研究の結果，養護実習において実習生にとって脅威となるストレッサーが養護技術的なものに起因した問題ではなく，周囲の期待や教師との関係など心理的な，特に人間関係的要素を含んだ実習ストレッサーが中心であることが明らかになった．従って，これらのストレスの有り様は非常に複雑であり，例えば，実習生の側の特定の要因をコントロールすることによってのみ，軽減化が図られるとも考えられない．

しかし，本研究で得られたもう一方の結果は，ほんのちょっとしたきっかけや事象との遭遇が，実習生のストレスを大きく左右することも十分に示唆されたとも考える．いずれにしても養護実習という場において，実習生が必要以上のストレスのために身動きとれない状態になることは決して好ましいことではない．それらのストレスの多くが，きわめて心理的なことに起因しているとすれば，単なる技術向上に向けたカリキュラム改善以上の取り組みが早急に必要になると考えられる．従って，今後は，本研究で得られた種々のストレスの実態がどう解決されうるのか，あるいはどう癒されるのかについての検討が必要となることは明らかである．

参考文献

有村信子：養護実習を通した学生の意識の変化，鹿児島純心女子短期大学研究紀要，28，47-53，1998

福岡欣治・橋本宰：大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係，教育心理学研究，43，185-193，1995

後藤ひとみ：養護活動の計画と評価に関する一考察―養護実習における救急処置活動計画の活用をとおして―，第42回日本学校保健学会講演集，379，1995

保健体育審議会：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興のあり方について（答申），保健体育審議会，28-29，1997

鹿児島県教育庁総務課編集：教育関係者必携平成11年度版，1251-1336，1999

勝倉孝治・田中輝美 ・杉江征・山元奨・山際勇一郎：小，中学校教師の学校ストレスに関する研究　―教師用ストレス尺度作成の試み―，日本教育心理学会第38回総会発表論文集，258，1996

古屋健・坂田成輝・音山若穂：心理的ストレス・モデルに基づくストレッサーの分析―理論的意義と教育実習ストレッサーの実証的検討―，群馬大学教育学部紀要，46，461-479，1997

栗山容子：中等教育における教育実習生の自己評価尺度の検討，教育心理学研究，44，322-331，1996

教育科学研究会編集：教育「中教審答申をどう読むか」，国土社，605，1996

宗像恒次：行動科学から見た健康と病気，メヂカルフレンド社，1996

内外教育：教育課程審議会（審議のまとめ），時事通信，4929，12-66，1998

内外教育：中央教育審議会「心の教育」答申，時事通信，4931，4-17，1998

日本学校保健学会「養護教諭養成教育のあり方」共同研究班：養護実習，これからの養護教諭の教育，東山書房，90-95，1990

日本子どもを守る会編：子ども白書 '98，草土文化，1998

日本子どもを守る会編：子ども白書 '99，草土文化，124-136，1999

岡安孝弘・島田洋徳・坂野雄二：中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果，教育心理学研

究，41，302-312，1993
大野木裕明・宮川充司：教育実習不安の構造と変化，教育心理学研究，44，454-462，1996
音山若穂・古屋健・所澤潤：教育実習生のストレスに関する基礎的研究　，群馬大学教育実践研究，13，225-238，1996
坂田成輝・音山若穂・古屋健・所澤潤：教育実習生のストレスに関する基礎的研究　，群馬大学教育実践研究，12，243-256，1995
佐藤和子・松浦英治・藤盛真佐紀・熊野佳子・水島和美：養護教諭養成課程学生の臨床実習中における生活と疲労について，第41回日本学校保健学会講演集，301，1994
嶋信宏:大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究，教育心理学研究，39，440-447，1991
竹田由美子・畑中高子：養護実習内容の検討　一学生の保健指導案より一第45回日本学 校保健学会講演集，310-311，1998